

ここに、 こんなに かけがえのない 親と子の宝があります。

今、皆さんは、赤ちゃんや幼いひとと、にぎやかな日々をお過ごしのことでしょう。そして、皆さんは、お子さんが、心豊かに、できれば、思慮深く育てほしいと、願っておられることと思います。なにかしら不安の多いこの社会を、人間らしく生きぬいてほしいとも。

でも、そのために何をすればよいのか…。世の中には、親の気持ちを急かして、迷わず情報があふれ、そのなかで、皆さんはこの小冊子を開くことで、絵本というものに出会おうとしておられます。私たちは、皆さんの、この出会いを喜びとします。なぜなら、そこには、子どもの、人としての能力を育て、親と子を幸福と信頼で包む、いくつもの宝が埋もれているからです。



「あなたってほんとうにしあわせね!」(童話館出版)

絵本には、魔法の
力があります。

すぐれた絵本とは
どんな絵本？

「絵本を読んであげていると、子どもをいつそうかわいく思えます」

「絵本をとおして、子どもの成長を感じられます」

「親子で絵本を開いていると、ふしぎと穏やかな気持ちになります」

私たちは、四十年にわたって子どもと絵本にかかわり、その間、多くの親の皆さんと出会ってきました。その方々が一様に、このように言われます。

絵本は、子どもにだけ恵みをもたらすものではありません。子どもと一緒に絵本を楽しむ大人へも、同じくらいに平安と幸福をもたらします。これが、絵本の魔法の力の意味です。

さて、その絵本が魔法の力を持つには、なにより、質の高いものである必要があります。絵本であればなんでもよい、というわけではけつしてありません。

幼年期の子どもは、たいへんな勢いで成長しています。その成長の時に、できるだけ質の高い、すぐれたものを伝えたい。そのようなものこそが、子どもをよりいっそう豊かに育てる力に恵まれているからです。

では、すぐれた絵本とはどんな絵本のことでしょうか。それは、子どもに、どんな良いものをもたらすのでしょうか。絵本の三つの要素——①絵②言葉③物語り——に沿って、簡単に述べてみます。



① 美しいものへの感性

子どもは絵本を読んでもらいながら、いつしんに絵を見ています。子どもにとって絵本の絵は、生まれて初めて出会う美術です。だからこそ絵本の絵は、子どもに見つめられるに足る美術であってほしい。そうすることで、美しいものへの感性を育てたいと思います。この想いのもと、私たちは、絵本の絵を美術として展覧する場として、長崎市内に「祈りの丘絵本美術館」を運営しています。

② 言葉を育む

すぐれた絵本は、洗練された美しい日本語によってつづられまします。子どもは、未知の美しい日本語を、身近な大人の声で読まれる物語りの楽しさにのせて、身につけていくのです。

言葉は、考え、思い、学び、伝えるための手だてです。言葉が豊

かになることは考えや思いが豊かになることです。それは、人が人らしく生き、社会のなかで、人とかかわりを持って生きるうえで、とても大切なことです。

これほど大切な言葉の力は、乳幼児期の、大人からの語りかけや、絵本を読んであげるといって、温かく、人間的なふれ合いをとおして、より豊かに得られていきます。

③ 子どもの真の姿を描く

絵本の①絵と②言葉によってつづられるのは、③物語りです。

その物語りが、真に子どもの心の世界と響き合っているかどうか、すぐれた絵本かそうでないかが、わかれます。

また、たとえば、三才と五才の心の成長には、ずいぶんと開きがあります。そうすると、すぐれた絵本であっても、その子の心の成長に感じていないと、ミスマッチということになりかねません。(そ

れが、「童話館ぶつくくらぶ」のコース別編成に生かされています。)

私たちは、今を生きる子どもの、心の深いところに寄り添い、よりよく生きようとする子どもの心を励ましていく、そんな絵本を手渡していきたいと願っています。

読み聞かせで開く 宝の箱

さて、子どもの心の成長に応じた、すぐれた絵本を手にしたとしても、それをそのまま子どもへ渡すのでは、せつかくの宝の箱は開きません。宝の箱を開けるには、特別な言葉が必要です。それは、絵本を読んであげる大人の言葉です。つまり、絵本とは、子どもが文字を読めるようになって自分で読む本ではなく、子どもに読んであげることで生命いのちのかよう本です。では、「特別な言葉」によって開けられた箱に輝く宝のなかから、三つの宝をご紹介します。

① 子どもが本と仲良しになる

「うちの子は四年生ですが、本を読みません。(つまり、読めません。)どうしたらよいでしょうか?」

このことは、文字は読めても本が読めるわけではないことを示しています。本を読むということは、本の言葉を頭のなかで絵(イメージ)に描き、それを瞬間的に連続させていくことです。それなしに、人は本を読み進めることはできません。

絵本を読んでもらっている子どもは、目の前の絵本の絵は、物語りを追いかけるように変化していきます。まるで映画のフィルムのように、心のスクリーンに映しだしているのです。そうし



—親の皆さん自身がつづる、118編の絵本と子どもと家族の物語り。

て、物語りを理解し、楽しみます。

この「眼に見えないもの(絵)を見る力(想像力)」こそが、今、絵本を楽しみ、将来、自分で本を読むために必要な力です。その力は、絵本を読んでもらうことよって培つちかわれます。これは過保護でもなんでもありません。子どもが、絵本や本と仲良しになつていくためのしぜんな道すじなのです。

②「生きること」を語る

たとえば、およそ五才から七、八才という年齢は、子どもが自分とおして人間を見つめ、また、社会との接点に立つとする年齢でもあります。そんな彼らに、人生の先輩として、親として、語り伝えておきたいことは、さまざまあるように思います。それは、改めては口にしにくいけれど、人間として大切なこと——愛し、愛される、自分を見つめる、人間への洞察とうさつ、正義と善、友情、一歩

踏みだす勇氣、やさしさ、ユーモア、悲しみや喜びへの共感、支え

合つて生きる、自然、働くこと……。これらのことを語り伝えることで、彼らに、社会への道すじと人生への励ましを語ることが出来ます。そして、もしかすると、このことが、子どもを育てるといふことの意味なのかもしれません。

けれど、あわただしい暮らしのなかで、そんなに大切なことであっても、子どもに直接語ることはできるものではありません。それに、どのように語ればよいのかもわかりません。そうなのですから、のためにこそ、人類は物語りを生みだし、物語りに託して語るべきことを語ろうとしてきました。その物語りが、現代では、絵本や本になつていのですね。

一方、この年齢の子どもたちは、自分で読める程度の絵本(本)からは、そのように深いものを読み取ることはできません。聞く、話



す、読む、書く、という言葉の力のなかで、最も早くに発達するのは、聞く力です。子どもは、絵本を読んでもらえば——つまり、聞くことができれば——ずいぶん深い内容を理解できますし、情感を深めていくことができます。

③ なにより、愛の表現です

子どもに絵本を読んであげるとは、さらに大きな恵みをもたらします。それは、絵本を読んでもらうことは、自分へ向けられる直接の愛の表現だと、子ども自身が知っているということです。その時間は、子どもにとって文字どおり、身体も心も抱きとめられ、あまえを受け入れられ、丸ごとの愛を感じていられる時間です。

今の子どもたちの苦しみの多くは、無償の、ただ温かく抱きとめられるだけの愛に満たされていないからだと思います。大人の気に入る「良い子」でいることで、その対価として愛情が与えられる、と子どもが感じているのだとしたら……。さりげなく素朴そぼくに、絵本を読んであげる。ただ、それだけで、私たちは、子どもが切に望んでいるものを手渡すことができます。

心の土壌を耕すことから

親の皆さんから早期教育についておたずねを受けることがあります。「小学校へあがつて人並みにやっつけていけるように……」という気持ちは確かにそうですね。でも「早くに走りだせば、それだけで多くの実りが得られる」というほど、人間は単純にはできていないようです。

この年令の子どもは、お勉強をする時期ではありません。そうではなくて、近い将来、勉強ができるようになるための土壌を、深く耕していく時期です。耕されて



いない大地に種をまいたところで、力強い苗が育つでしょうか。子どもは今を生きる人です。今を存分に、子どもらしく生きることが、未来につながります。

真に学ぶ力を

絵本は楽しむものです。心を高く押しあげていくものです。そのことを忘れてはいけません。実は学びについても、結果として、いくつもの恵みをもたらします。

①言葉の力（豊かな語彙を使って、考える、表現する。）

②言葉をつなげて新しいものを組み立てる力（思考力）

③お話を集中して聞く力（学校での学びは、ほとんど先生の言葉を聞くことで成り立っています。）

④抽象的な思考力・想像力

⑤活字や本への親近感

⑥知的な好奇心／……………。

本当に大切なものは、おのずとあとからついてくるもの。「童話館ぶつくくらぶ」で育った思春期・青年期の人たちや、その親の皆さんが、自分の言葉で、大切なことを語ってくれます。（八頁や裏表紙に、かつて会員だった方々のお便りを掲載していますので、ぜひお読みください。）

家庭に静かな時間を

これまで述べてきましたように、絵本は子どもに、人としての力と恵みをもたらします。そしてその副産物のようにして、親と子の結びつきを深めていくのです。けれど、一方で、この結びつきを危うくするものも、家庭には存在します。

それは、テレビやスマートフォン、タブレットなどの電子メディアです。生活必需品として日常に浸透しているものでもありますが、それでも、多くの時間を電子

メディアが占めることは、子どもの言葉の発達を遅らせ、意欲や集中力や思考力など、人としての力を弱めていくばかりです。

意識して、電子メディアを遠ざけてみませんか。そのなかから、きっと、子どもと過ごす新しい時間の発見があると思います。

どうぞ、家庭に静かな時間を取りもどしてください。その静けさのなかから、本来の家族の姿がよみがえってきます。

そうして、子どもとふれ合い、語らい、遊び、絵本を読んであげてください。そうすれば、何も心配することはありません。

すぐれた絵本の物語りには、先に生きた人々の、子育ての知恵が語りこまれています。絵本のある子育てをとおして、親だけの孤立した子育てから、多くの人々の経験や知恵とともにある子育てへと、提案したいと思います。（おわり）